

V. ソローキン『メテリ』[吹雪]における 伝染症のアレゴリー

ガブラコヴァ・デンニツァ

(ウェリントン・ヴィクトリア大学、上級講師)

もともと日本文学、中国文学に興味があって研究してきたのですが、今回は自然と中国的な空間に開かれた、ロシア文学の作品を取り上げようと思っています。これには少し背景がありまして、今年3月(2020年)に東京大学を退職なさった、ロシア文学・ポーランド文学がご専門の沼野充義先生が以前、「デンニツァはブルガリア人なので、より文化的に近いロシア語、あるいはブルガリア語により資料を紹介すると、みんなもっと興味を持ってくれる」というようなアドバイスをくださったことがあります。十何年後かに先生のアドバイスに実験的に従って、ロシア語の小説を取り上げようと思ったので、今回の論考は沼野先生にささげたいと思います。

記憶の再配置は、伝染症が引き起こす非常事態と奇妙な関係を持っています。それは特に、書籍との再会においてでしょう。2010年の7月にロシア・東欧研究学会発表のため、沼野先生ご夫妻他と一緒に、スウェーデン・ストックホルムを訪れました。学会会場のロビーに並んだ出版社出品のテーブルで、今回取り上げる小説を買ってみました。それは、当学会におけるロシア文学関係の発表では、現代ロシア作家の中でウラジーミル・ソローキン(1955年生まれ)が一つの基準となっており、現代古典のような存在であると知ったからでもあります。このように、一冊の書籍が、北欧から香港、そしてニュージーランドまでダンボール箱の中で世界を移動してきました。本棚に並ぶ前の書籍の状態を、ホミ・バーバがヴァルター・ベンヤミンに倣って「混沌」状態と捉え、そこから大学関係者が抱え込んでいる「その土地固有のコスモポリタン」的な側面を顕にしてみせると書いたことがあります。ダンボール箱が示唆する「修正的コスモポリタニズム」とこの一冊は、まさしく断片的な読解力の意義を問い直させてくれるような気がします。私の研究集積から見れば、Метель [吹雪] は気になる「異物」でした。そして、この「異物」的な感覚は、見事なまでに本の表紙と呼応しています。その表紙には、絵葉書を連想させるような、雪に重く垂れ込んだ枝の松を背景に、得体のしれない結晶のピラミッドが置かれています。そのピラミッドは、小説の内容によると特別な麻薬商品であり、大変危険な伝染病流行地区に向かっている医者のをソリを脱線させてしまう躓き石になっています。これは現実界と別の次元の危うい接点の象徴なのでしょうか。わたしは2017年4月に、札幌発稚内行の小さい飛行機の中で、この本を読んでみたことがあります。飛行機の窓の下に見たことのなかった林が広がり、雪による視界の悪さのせいで飛行機が一時間ほど空中をぐ

るぐる回ったあと、札幌に折り返しました。当時は、世界規模にいわば「旅程変更」が訪れることを想像だにしませんでした。2020年に香港でも大変お世話になった張政遠先生に「伝染症と文学」（東京大学東アジア藝文書院主催）というテーマの発表会のため声をかけていただいた時には、このキーワードで、この小説のことしか思い浮かびませんでした。読書の偶発性は、断片的な形で「経験」であり、「旅」であり、「つまり冒険」でしょう（沼野充義 2017、9-10 頁）。「ある種の「翻訳」のように、[専門外領域の] ことばの見えない境界線を超えてゆこうとする冒険であることも、よくわかった」（リービ 2007、4 頁）とも言えます。

『吹雪』という小説は、実はたいへん興味深い小説です。その読書体験は二重的に、「冒険」、「旅」、「境界線」という概念をなぞらえています。ソローキンという現代古典的作家に相応しく、彼の作品は複数の日本語訳がありますが、この『吹雪』に関しては私の調べた限りでは和訳はなかったので、不十分ながら主に私が興味を持った数点についてご紹介していきたいと思います。もともと Метель という単語が、吹雪という言葉を表すときには、ロシア文学におけるもう少し古い時代の文学的な記憶を蘇らせているということは、資料に目を通した限り多くの評論家に指摘されています。

要するに、それは実際に悪天候に逆らって前進するプロットの話だけではなくて、この単語にはさまざまな形で、ロシア文学の文豪プーシキン、ブローク、トルストイなどからのモチーフが織り込まれています。その意味では、ある種のメタ的な小説としても読めます。あるいは、非常に典型的な意味のポストモダン小説にもなっており、「ロシア文学」の寓喩としても捉えられるので衝撃的です。その二重性は、かけ離れた外部から持ち込まれた伝染病と対立し、ワクチンを運ぼうと抗っている主人公医師プラトン・ガーリンの強引な移動という筋道を、過去と未来、文明と自然、ヨーロッパとアジア、小と大、罪と徳、生と死などといった抽象的な諸対立の間に宙吊りにさせてしまいます。

ガーリンの旅ですが、それはロシアの地理学的に特定可能ではないような、いわゆるロシアの広い奥地のほうへの旅です。旅の目的地はドールゴエという村、ロシア語で字義通り「遠い」という目的地です。そこでボリビア疫という伝染病がはやり、ホラー映画を思わせるような病死した死者が異常な力を持ち、地面を爪で掘り起こし、まだ罹っていない人に噛み付くという恐ろしい状況。そこにワクチンを運ぶ責任に満ちて、まったく交通の便が効かないような雪野原の中をひたすら進もうとしている旅が、小説のプロットなのです。ですから、ある種の詩的・存在的コードとして吹雪のイメージを解説するならば、それは目標に向かって進もうとする意欲としての道のモチーフが、いかに目的から自己目的に転じるかを、ほとんど立体的に提示した作品として読み進められることになります。言うまでもなく、それは目まぐるしい形での読書体験の比喩でもあります。

政治的に正しいかどうかは分かりませんが、その病気の名前がボリビア熱という、中南米の国の実名で明記されています。イメージ効果としては、それはロシアから非常に遠い地域という意味にしかとどめることができず、「ボリ」＝「痛み」というロシア語と少し

関連がある意味で使われていたという解釈もあり得ます。ですが主には「非文明的」な外部からの残忍な侵入というイメージが、象徴性を帯びて展開している面が強いのです。そして、障害を乗り越えながら前進する移動というコードの中に、救済のモチーフと自己犠牲が織り込まれています。要するに、ガーリンという医者が確固たる深い責任をもって、たいへんな危険を冒してまで、非常に危ない状態で病原地の村へ無理やりに進もうとしているところが、やや自己犠牲的な、ほとんどキリスト教的な宗教的な次元にいたるような形で描かれています。それは同時に、話を読むにつれてたいへん望ましい正当な自己像からどんどん離れていくという点も見えてくるので、救済と自己犠牲的なイメージの裏面には、転落墮落のモチーフを読み取ることができると思います。彼が休憩のために立ち寄る二箇所では、ガーリンはそれぞれ性欲、そして薬物の誘惑に溺れてしまうわけです。ガーリンがドイツ語の単語も使っているところを見ると、医学というある種のロシアの外部から輸入される文明的な発展を背負って前へ進んでいることに対して、吹雪は視界や移動を遮るような形を持った自然の象徴という、一つの対立の図式をその小説の裏に見てとることができるのではないかと思います。従順にソリで案内することを引き受けてしまうペルーフシャという無学であり性的不能である男のあり方もその対立を裏付けています。

さらに、先ほど外部から侵入しているものとしてのボリビア疫のことを言いましたが、これ以降この医者が進もうとしている雪の中の移動は、同時にあるたいへん象徴性の高いロシア的な風物から、緩やかにアジア的な風物へと濃淡的に変化するのがこの小説の空間の興味深いところです。3種類の外部があるとして、ホラー映画同然現実味のないボリビア、医学など文明的な面を持つヨーロッパ（もしくはロシアの中にあるヨーロッパ的な教養）、そして、速やかに状況適応している中国です。小説の最後に当然のように中国人に助けられているガーリンが「下手な中国語で」とはいえ、「我是医生」と訴えています。中国語運用は生存コードとでも言えるのでしょうか。実はアジアといいますと、ソローキンが特に関心のある地域として中国がありまして、今回の発表に当たって少し調査を試みたところ、実は中国の中で中国語訳が出版されています。小説の初出は2009年なのですが、2012年の時点でもう中国の外国文学の賞のような賞を受賞されていて、逆にアジアからどのようにこの小説が見られているかは、ちょっと別の機会に譲って考えたいと思います。小説のラストシーンとしてほとんど研究されていないテーマなのですが、中国的なたいへんパワフルな勢力のようなイメージが立ち上がり、そこに鏡に映されている中国経済発展という観点からの関心もありうるのではないかと思います。つまり、ガーリンが乗せてもらったソリは50頭の「小さい」馬に引っ張られていることに対して、遭難した時に、運ばれているのは、3階建ての建物の大きさの1頭の「大きい」馬に引っ張られている中国の電車です。因みに、小説中の中国人のロシア語は大変流暢です。この偉大なイメージに先立つのは、複数の日常に散りばめられている詳細です。中国製と明記されていなくても、風車の家にあった「中国の急須」（ソローキン2009, 83頁）、お祭りの場面に見世物として出された、ホログラムのような「生きた映画」（110頁）、「生きた写真」（204

頁)、「生きた葉書」にあるクリスマス・ツリーのような木の景色(246頁)、そして麻薬売買を行う小アジア的な団体がテントを作る時に使う「自己生成的なフェルト」などが、そのような詳細に思えてなりません。比喻としての中国は、どのような意味を持っているのでしょうか。隅々にまで入り込む庶民的美学向けの、電気仕掛けの生活用品から、圧倒的な馬力を誇る技術までの合理的かつ柔軟かつ巧妙の適応でしょうか。たしかに、東方正キリスト教的運命論かつ医療技術に由来する自己犠牲的(麻薬の効果で、ガーリンが東欧の広場で、公に死刑されているという宗教的な殉教者たる妄想をみる)及び他愛的精神を披露するガーリンと対照的です。

先ほど触れたように、『吹雪』はほぼ二次小説のように、さまざまな文学的な表現を織り合わせているので、たいへん神話性の強い性格のものであることも指摘したいと思います。二次資料の中で見受けた興味深い表現として、吹雪というものの自体が一つの風景単位として考えることができ、それはほとんど抽象的な風景単位です。その中に、半分皮肉的な態度で織り込まれているのは、いわゆるロシア的精神の問題です。ロシア的精神といえますと、少し美しい響きの言葉にも聞こえますが、ロシア的精神というふうに表現されている小説中の箇所は、だいたいお酒に酔いつぶれる状態を指し、そこまで理想像的なものではありません。

非常なまでに磨き上げられた文化的な神話として、ロシアの特殊な関心と捉えるべきものでしょう。ある種の知識人、あるいは先ほど文明対自然の対立として取り上げましたが、知識人を代表している医師が教育を受けていない現地の者に手伝ってもらっています。ある種の大衆、一般民衆と知識人というこの2つの層に分けられているようなこの図式も、一つの文化的な神話として小説の構造に織り込まれているということも言えると思います。ポストコロニアル理論という分野のロシア版にでも当たるポストコロニアル理論の中では、このような図式は内的植民地化という風な呼ばれ方もしますので、それについてもちょっと触れておきたいと思います。

どういような神話性が出ているかということ、結局その奥、ドールゴエというたどり着きにくいような場所なんです、ただその疫病を巡る描写がたいへんグロテスクでホラー映画のような描写なのです。非常に恐怖のイメージも醸し出しつつ、畏怖のイメージや陶酔のイメージ、忘却のイメージ、その全てが構造の中で神話性として潜んでいる、奥のほうへ潜まされているということが言えると思います。一体どのような結びつきでしょうか。もっとも初心で純粋な精神の奥が、恐怖の病原地に転じるというグロテスクさ。その意味で、ロシア精神の奥底がもっとも親しまれたものでありながらももっとも恐れられたものでもあるということになります。言うまでもなく、以上のような設定が植民地的無意識の構造と呼応しています。ここに性差、つまりジェンダーの問題も関わってきます。まず、医師ガーリンが国家司令として悪天候にソリを出させている車夫ペルフィーシャは、大変田舎風のロシア人として描かれています。彼のソリを引っ張っているのが、鶉サイズの小さい馬です。続いて、吹雪宿りする風車の家の主人が、人形サイズの小さい男性で、主

主人公ガーリンに彼の妻を寝取られることとなります。このような脱男性的モチーフが、主人公が見舞う最後の障害にまで及びます。魔法的リアリズムとでも言えるような手法で、雪に斃れた巨人の鼻孔にソリが挟まれてしまいます。目的地の近くでのこの事故のあと、ガーリンが雪の中で、ワクチンを入れたかばんを両手に残りの道を歩こうとします。その時に深い雪に足を取られもがき苦しみながら迷い、巨大な陰茎をつけられた雪だるまに出くわします。医師の推測では、斃れた巨人が、酔いどれの遊び心で、その雪遊びをしたのです。陰茎こそ巨大ですが、それは、いたずらのように雪だるまに付けられて、さらに酔っ払った彫刻家が雪の上に斃れ、鼻にささったソリの板を取るために、鼻の骨を削られてしまう羽目になるわけです。もし古典的な意味で、野生の空間に突き進もうとしている医師の旅程を、男性的な動きに例えることができるなら、ガーリンの精力も小説の最後に完全に尽きてしまいます。その内的植民地的構造に雑音を持ち込んでいるのは、最後にある中国との対面の場面です。要するに図式として非常に興味深いのですが、たどり着く先は、具体的な意味であるのか、抽象的な意味であるのか、ある種の中国的な空間にたどり着くのです。それは、ある解釈によれば、中国がある種の拡大鏡としてロシアを映し出しているというような、必ずしも政治的な意味ではない、ある種の構造として描かれているのではないかということが言えると思います。実際にソローキン自身が、中国がロシアの無意識として捉えられるというような、少し謎めている発言を残しているところがあるので、地政学的な寓意の領域は広がっていくばかりだと言えます。ただこの小説に限って、最後に現れるロシアか中国、わたしも中国的という風に言いきりたくないような、ある種のロシアと中国の間の境界線が曖昧であるような事態が、何らかの再生のヒントのように位置付けられているのではないかということちょっと思っています。大きい馬に引っ張られている中国の列車と小さい馬に引っ張られたロシアのソリというスケールのコントラストについて、小説中の世界をきれいな対称的な図式としてではなく、ある種のゆがみや錯覚や突然変異のような、通常疫病や伝染病のときによく聞くような、共鳴しているような表現と結び付いて考えることは可能ではないかというふうに思います。そのことは何を意味しているかということ、たいへん暫定的な結論なのですが、それがある種のアナロジーのことを誘いつつ、実はそのようなアナロジー、さまざまな問題の間のアナロジーに対する違和感をも同時に表しているのではないかと思います。

わたしが特に違和感として強調したいアナロジーというのは、たとえば国境の通過。特にロシアと中国、どこまでロシアだった、どこから中国が始まったということは非常に曖昧な国境通過の問題です。しかも規模のたいへん大きな問題に対して、それが簡単に国際関係やそのような政治、先ほど政治と病気についてたいへん興味深いご発言をうかがいましたが、この例からアナロジーを確認しつつ、それに対する違和感を保つべきという姿勢の重要さを伺えます。

先程触れた大きい馬というのは、これはそういう種類のアナロジーなのですが、馬に引っ張られている中国の列車の例にも表れているように、ある種の未来像です。ただ、

その未来像がちょっとレトロと言いましょうか、わたしたちが慣れているような最先端技術がたいへん洗練されているとは限らないような未来なんです。それについて、ソローキンの文脈の中でレトロ未来というような表現を使っている評論をちょっと見受けました。この問題はすでに、日常品として小説の中に散りばめられた未来的な要素（空中に光っている時計の数字など）の延長線に捉えることもできます。あるいはまた安易な類似を拒むような、大規模な経済発展と環境保護の関係についての示唆にでもなっているかもしれません。

最後に、予防接種という、医師を吹雪の中の冒険へと送り出す医療技術＝文明の「武器」（実は、ガーリンはウイルスによって以上な力を獲得する死者から身を守るためにも、実際のピストルも持参しています）について、まさに今学生のゼミで読んでいる『勉強の哲学』の内容に絡めて考えてみたいと思います。断っておきますが、先程の地政学的な諸問題と同様にこの対応も、安易なアナロジーとして捉えるつもりはありません。私達は現に、コロナ禍という終着点が見えない「吹雪」のような状態を「ワクチン」を頼りに見越そうとしている真っ只中なのであります。脱線のように感じるかもしれませんが、『勉強の哲学』の中で千葉氏は、いわゆる「環境のノリ」から自由になるべく、「言語偏重」になることを勧めています。言語使用を、「道具的」から「玩具的」へと重みを移すという意味です。いうまでもなく、言語の意味作用は、狭義の言葉使用を超える形で捉えられ、混沌に対する秩序の機能としてでも捉えられるでしょう。『吹雪』と照らし合わせるなら、ワクチンを積んで、障害を越えながら、茫漠の雪原を通る「遠い・長い」＝ドールゴエ村への道です。ガーリン自身は、特に麻薬体験の驚くべき効果のもと、その道を人間の人生に例えています。そのスケールのずれが滑稽です。『勉強の哲学』の中では、環境から自由になるための思考として、言語の「玩具的使用」を説く際、「アイロニー」、「ユーモア」、そして「ナンセンス」という方法が紹介されています。「(0) 最小限のアイロニー意識：自分が従っているコードを客観視する／その上で、／(1) アイロニー：コードを疑って批判する／(2) ユーモア：コードに対してズレようとする」（千葉 2017、75 頁）。この2つのモデルを、千葉氏はそれぞれ「追究型」と「連想型」の勉強法として展開させています。勉強のテーマを選ぶ時、両方の方法の組み合わせが望ましいのですが、勉強領域を無限から有限にするためには、千葉氏は、それこそスケール移動しながら、アイロニー＝追究型を避けるべきだと述べます。

勉強の対象、範囲を有限化するためには、3つの方法があることになる。ここで、決断と中断の対比は、アイロニーとユーモアに対応している。

- (1) 環境のノリに合わせる：保守的有限化
- (2) アイロニー：決断による有限化
- (3) ユーモア：比較の中断による有限化
- (…)

決断は、環境の絶対的な外部に出る、他のみんなをガン無視する「自分なりに」です。

(…)

こうして、アイロニーはそもそも批判的になることなのに、決断主義に転化すると、無批判な生き方になってしまいます。狂信的になってしまう、他の考え方を聞く耳をもたなくなる、というか、他の考えをもつ複数の他者はそもそも存在しなくなる。(千葉 2017, 140-141, 145)

医師ガーリンの存在には、以上のようなアイロニー、絶対的根拠の追究、そして決断主義的な様相を読み取れます。彼の「享乐的こだわり」が薬物乱用なのは問題だとして、そのような場面が挟まれることによって、ガーリンは自身を客観視することになります。ユーモア的な「目移り」=連想(千葉)は、伝染症との戦いの中で、どのように可能なのか。ソローキンの小説の最後に出現する流暢なロシア語を話す中国人達という「他者」は、疫病=吹雪=混沌した恐怖が広がっていく他者に対する、一つの「中断」なのでしょう。

「目移り」としてのユーモアの発想法と重ねて、またスケールを縮めましょう。実は、今回の企画のおかげで、この小説の読書体験自体を通して考えさせられたのは、伝染症対応として余儀なくさせられる隔離生活、移動可能性の制限、そしてまさにレトロ未来的な疑似体験のことで。本稿の初めに触れた表紙なのですが、このような結晶のクリスタルのピラミッドのようなものが、雪野原の上に落ちていて、その上にソリがぶつかり壊れてしまうという、小説の旅における最初の障害物の存在に拘ってみます。書籍というものは、この本を含めて、たぶん今の社会では、ある種の異物的なもののようにも感じなくもありません。移動と不動、特に今多くの方が体験している自己隔離やさまざまな移動に関して課されている制限でもっての不便な状況が続いています。しかし、同時にその強制的な不動によって、ある種の読書経験と非常に興味深いエコー、シンクロがあるのではないかと少し思っています。薬物のような疑似楽観主義的效果をもたらすとは言いませんが、千葉氏にならって、言葉は洗脳にもなり、脱洗脳にもなりえると信じてみたいのです。そして、本稿で取り上げている内容の口頭発表の時期から現在まで、考え続けたテーマであるグラフィック・デザインで締めくくらせて下さい。カナダで活躍している香港出身の黄楚喬・李家昇の展示方法における書籍や資料の扱いに対して改めて、感銘を受けました。90年代の香港で紙媒体の雑誌の編集に携わっていた二人は、時代の波に合わせて、ウェブ雑誌 Double Double を2年前発表しました。オンライン誌というデジタル・メディアによって、古い資料や作品の回顧や整理作業が息を吞ませるような形で展開しています。その中、興味深いヒントとして、黄楚喬の虚構風解説にあった、家を出られない状況を余儀なくさせられたときには、さまざまな片付けていないような作業や、忘れられたような企画などを再評価できるような、実にありがたい機会に恵まれているというようなメッセージを受け止めました。長い間開ける余裕がなかったダンボール箱詰め

書籍の整理です。そのようなイメージを思い浮かべながら、もともとのロシア語の吹雪、Метель の語源が「掃く」、あるいは片付けるという意味を思い出し、ある種のレトロな活動に没頭するような貴重な機会を通して、世界を住まうあり方を考え続けようと思います。

参考文献

- 千葉雅也『勉強の哲学：来たるべきバカのために』文藝春秋 2017年
- 沼野充義（編）『つまり、読書は冒険だ』光文社 2017年
- リービ英雄『越境の声：日本語と世界文学の新たなプレリュード』岩波書店 2007年
- Даниленко Юлия Юрьевна. “Реминисценции классики в современном тексте (на материале повести «Метель» Владимира Сорокина)”. *Филологический класс* 2:28, 2012.
- Кучина Татьяна Геннадьевна. “Зимняя дорога: стилевая реконструкция метасюжета в повести «Метель» Владимира Сорокина”. *Ярославский педагогический вестник* 1:1, 2012.
- Петухов Сергей Владимирович. “Современная русская литература в Китае: проблемы восприятия и интерпретации.” *Вестник Бурятского государственного университета* 10:1, 2015.
- Полева Елена Александровна. “Сотериологическая проблематика в повести В. Сорокина «Метель».” *Вестник Томского государственного педагогического университета* 188, 2017, 11.
- Хабибуллина Маргарита Наилевна. “«Очарованность Китаем»: образ транскультурного будущего в творчестве В. Сорокина.” *ЖУРНАЛ Уральский филологический вестник* 4. Серия: Русская литература XX-XXI веков: направления и течения, 2014.
- Bhabha, Homi. “Unpacking my Library Again” in *The Journal of Midwest Modern Language Association* 28:11, “Identities,” Spring 1995, pp.5-18.